

戦国の典型的な山城

く く り じ ょ う あ と

久々利城跡

奉公衆土岐久々利氏の拠点

久々利氏とは

守護大名土岐氏の一族

『金山記全集大成』に、初代康貞から土岐三河守・悪五郎を襲名したと記され、『可児史略』には、土岐康貞の長男が久々利太郎行春と称したことが記されています。しかし、室町～戦国時代を通じて久々利氏については不明な点が多く、その詳細はつかめています。

奉公衆とは

室町幕府の直轄軍。足利一門、守護大名の庶流、有力国人領主など、約300人で構成

室町時代の久々利氏

応永25年(1418)には、久々利祐貞が荏戸上郷(現在の御嵩町上恵土、可児市中恵土)の代官となり、1400年代の半ばには「土岐久々利四郎」、「土岐久々利五郎」、「土岐久々利式部少輔」が奉公衆として京都に居住していましたことがわかっています。

土岐久々利五郎は、父親の墓の本尊として石造地蔵菩薩坐像を造立した土岐頼忠と考えられています。この地蔵菩薩は、久々利地内の圓明寺に祀られています。

戦国時代の久々利氏

久々利城を築いた久々利氏は、天文6年(1537)から10年にかけて烏峰城(のちの美濃金山城)主の斎藤妙春と激しく戦い、天文17年(1548)には、妙春を久々利城で暗殺して戦いの幕を閉じました。

一方、稻葉山城主斎藤龍興が織田信長と対立し、永禄6年(1563)に信長が小牧山城を築くと、信長の美濃攻めを警戒した久々利氏は、武田信玄と手を結んで支援を約束してもらいました。しかし、永禄8年(1565)に信長が中濃攻略を成功させると、信玄は信長と手を結びました。後ろ盾を失った久々利氏は、信長の家臣で美濃金山城に入った森可成に従いました。その後、天正11年(1583)には、可成に次ぐ美濃金山城主森長可によって久々利氏は討たれ、久々利城は落城しました。

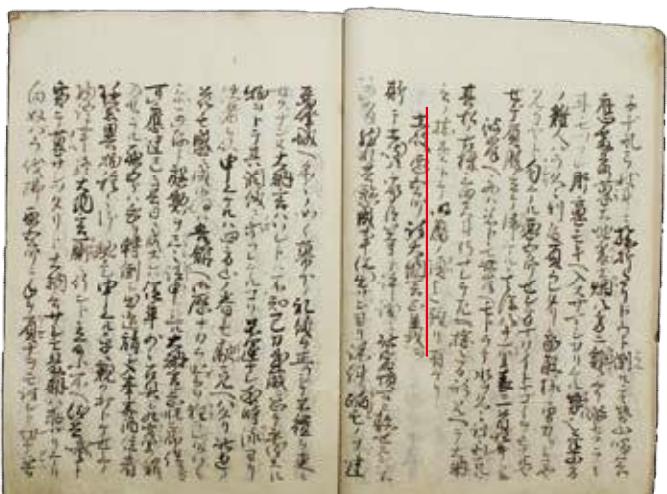
背面銘文

「文明十九年未六月二日
桃林源公居士廟所本尊

願主孝子頼忠白敬



圓明寺の石造地蔵菩薩



斎藤妙春暗殺の記事を記した『金山記全集大成』

久々利城の縄張りを読み解く

縄張りとは……曲輪の配置、櫓などの建物、堀や土塁、虎口などのパーツを組み合わせた城の設計のことです。山城の場合、城に侵入した敵を少しづつ減らす構造を工夫しています。

堀切（ほりきり）

尾根を断ち切るように設けられた堀のことです。尾根伝いに敵が侵入するのを防ぐための仕掛けです。北側からの侵入を防ぐため、何本もの堀切を設けています。



豎堀（たてぼり）

豎堀とは、等高線に対し直交して掘られた溝のことです。敵に斜面を横移動させにくくするために造されました。

横矢（よこや）

敵の横側から攻撃することを横矢といい、そのための土塁の折れ曲がりや、曲輪の張り出し、枠形虎口といった仕掛けを横矢掛りといいます。横矢を仕掛けることで敵の動きや人数を制限し、攻撃することができます。



土橋（どばし）

堀を渡り、曲輪をつなぐために設けられた狭い土の橋です。

虎口（こぐち）

城や各曲輪への出入り口のことを虎口といい、敵の攻撃を真っ先に受けることから、最も厳重に防御されました。土塁の設置によって直進させない喰違い虎口、土塁などで四角く囲んだ枠形虎口などがあります。久々利城の虎口は、直線的な侵入を防ぐため、その曲輪全体が枠形虎口となっています。



切岸（きりぎし）

敵の侵入を阻むため、曲輪の周辺斜面を断崖のように切り盛りした造作を切岸といいます。曲輪の面積を広げ、斜面を加工するだけで防御機能を高めることから、山城の最も基本的な仕掛けです。



※久々利城跡は、その規模の大きさから土木作業量が大規模であり、久々利氏の動員力の大きさがうかがわれます。

※久々利氏の時代の単調な曲輪配置から、森氏が奪った後に横矢や枠形虎口が導入され、徐々に改修されたと考えられる興味深い城跡です。